

平成二十七年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・パネルディスカッション・質疑応答

著者	圭室 文雄, 尾? 正善, 松田 陽志, 山口 正章, 宮地 清彦, 下室 覚道
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	21
ページ	65-76
発行年	2016-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000340



パネルディスカッション・質疑応答

パネリスト

圭室 文雄
尾崎 正善
松田 陽志
山口 正章
宮地 清彦
下室 覚道

司 会

司会

それでは、これよりパネルディスカッション・質疑応答に移らせて頂きます。

最初に、本日のご講演をお聞きして、少々まとめさせて頂きますれば、基調講演の圭室先生には、「近世における峨山派の動向」を発表して頂き、峨山派が中世に引き続き近世におきましても更に強固・強力になったというお話をお聞きしました。

続いて尾崎先生には「峨山禅師の御功績―檀信徒との関係について」と題されまして、檀信徒からのご寄進を多く受けられたこと、その理由は祈祷や受戒によること、あるいは峨山禅師のお人柄によりまして多くの寄進を受けた。それにより僧団が維持され、発展していったというお話を頂きました。

それから松田先生には「峨山禅師の禅風―『山雲海月』を中心として―」と題されまして、峨山禅師の著述であります『山雲海月』をご紹介頂き、峨山禅師の厳しい禅風をお話頂いたかと思えます。

山口老師には「峨山禪師の弟子たち」と題されまして、弟子方、特に二十五哲といわれるような優秀な弟子方のご紹介と人々とのつながり、自分だけ良ければ良いという精神では駄目であるというお話を頂きました。

宮地先生には「五院輪住制度について―その和合の精神を考える」と題されまして、總持寺の輪住制度のこと、それから特に一味同心、和合ということが日本の精神として古来からあり、この精神を瑩山禪師、峨山禪師もお持ちになって教団が発展していったこと、そしてそれを受け継ぐ現代の我々も「和合」という考え方が必要であるということをお話頂きました。

そこで会場の皆様からのご質問の前に、先ず、各先生方におかれまして何かご発表で言い足りないといううなことがありましたら、お願い致します。

圭室

先ほどは時間の制約もありお話し出来なかつたのですが、寺院の成立については中世と近世ではかなり違います。中世では開基檀那と言われる有力な外護者（スポンサー）がおり、寺院は開基檀那の菩提所として建立され、代々の開基檀那が菩提寺の経営を支えていました。しかし戦国時代の下克上の世になると、開基檀那がその地位を失い、そのため多くの寺が経営不振に陥り廃寺になった例も少なくありません。勿論そのような中で民衆の葬祭に活路を見出した寺院もありました。

近世の寺院の成立は各地に残る地誌や寺院明細帳によりますと成立の時期は大別すると二つの時期に分けられます。第一は寛永末期（一六三八〜一六四三）頃、第二は寛文期（一六六一〜一六七二）です。何れも幕府の宗教行政と緊密に拘わっています。

第一の寛永期は島原の乱が終息し、キリシタンが本格化し、日本人全員に寺請証文の作成が義務付けられ、家族単位で提出が命ぜられた時期です。このため多くの寺が必要と成りました。このことが檀家制度の成立

の契機になりました。

第二の寛文期は全国の大名領に宗門奉行が置かれ、キリシタン摘発が一段と厳しくなり、これまでのような寺請証文の作成と、それを集約した町村単位の宗旨人別改帳が作成されました。その何れにも寺院の住職が関与しました。それゆえここでも寺院が増加しています。この段階で檀家制度が確立します。宗旨人別改帳の作成はその後毎年行われ、明治三年（一八七〇）まで続けられました。この間に檀家制度はますます強化されました。

以上のように中世の寺院は開基檀那の菩提供養のため成立し、近世の寺院は寺請制度実施のため政治的に作られたといえます。

尾崎

今の圭室先生のお話を受けますと、やはり瑩山禪師の精神とは、『洞谷記』の中に書かれる、師檀関係だと思えます。その点を峨山禪師も強く意識されていますが、それは時代背景も当然あったと思います。

鎌倉の末から室町期、南北朝の騒乱という、非常に不安定な時期であります。それまで興隆していた寺院が、廃止に追い込まれるという様なことも当然あったと思います。

そのような時期に曹洞宗教団、特に山口老師が仰ったように全国展開するためには、その地域の方がたの信頼、信仰を集めなければならなかったわけです。そうした大切さを、修行の段階からしっかりと、育てていくということが求められていたのです。

それから、『観音堂縁起』（總持寺中興縁起）の中、瑩山禪師の言葉に、「諸人同心して合力し、当寺の山門を立て、圓通の冥応を仰ぐべし」とあります。皆が力を合わせ、山門を復興し、観音をまつるということを願いとすることが、書かれています。

ここにも、宮地先生の言った「一味同心」ということが、表れています。

そうした思いをしつかりと相承し、受け継いで、その地域に根差した活動をしたからこそ多くの信頼を得、土地の寄進を受け、そして弟子を育てる基盤出来たのだと思います。

どちらが先か、ということはあるかもしれませんが、信頼されるから多くの方から依頼される、それに応えた結果、土地を寄進される。そうした信頼に足る方だから、弟子も集まって来たのでしょう。

ただ単に厳しい禅風、優れた指導だけでは、弟子は集まったとしても、育てあげるだけの経済的な基盤を作りあげることが出来なかったのではないかなということ、申しあげたいと思います。

松田

私の発表はこの従来までは余り知られていなかったであろうこの『山雲海月』という文献を紹介することでありながら、本文を余り詳細にお話することが出来ませんでした。今日も資料では冒頭が一番最初の一説しか挙げていないわけですけども、延宝本と言われている刊行本におきましては、峨山禅師の法語になります。が、「山僧年已に八十有九」ということでこの八十九歳の時の説示であるということが明記されております。

これは中世の書写本には出てこないわけですが、先程読んだ跋文の所ではこの「遺教の御語なり」ということで非常にこの最晩年の説論であるということが跋文では指摘されておりまして、おそらくこの延宝本を編集する潭水という人がこれに更に具体化する様な脚色をおそらく加えたのかも知れませんが、八十九歳の時の非常に極めて厳しい嗣法門人に対する説論というものが展開されているのがこの『山雲海月』ではないかと思っております。

『山雲海月』の延宝本は全体三巻構成になっているのですが、これは先ほどの発表では申しあげませんでし

だが、三巻構成の最初の上巻の部分はかなり法語文献として完成されていると言いますか、一つの法語文献として元々あった物ではないかという風に考えることが出来るのではないかと思います。中巻や下巻になりますと、かなり公案や機関に対する拈提の言葉が、断続的に続いております。上巻に関しては、現在私共が読みましても、弟子達や法孫に対する峨山禅師の託する思いと言ったようなもの感じ取ることが出来るような法語ということになっております。

「夜話」というのは非定期で、夕方から夜に夜半にかけてのこの説法という形で、この『山雲海月』の説法は説かれておりまして、上巻の最後には「夜既に四五更に到る」という箇所があります。「四五更」というのは夜半の午前一時から朝方の五時ぐらいの時を指しますので、本当にこの夜半を通じたこの説法がこの『山雲海月』にまとめられているということも合わせてご紹介したいと思います。

山口

では、二点だけ補足させて頂きます。最初に明峰禅師の弟子と峨山禅師の弟子と特色が違うと言いましたけれども、更には言えば、明峰禅師は七十四歳で亡くなられます。その後、峨山禅師は二十年近く生きられるわけで、明峰禅師が亡くなった後、今度は明峰禅師の弟子を峨山禅師が多く引き取るという事実がございます。ですから、峨山門下にて大活躍した無底良韶禅師、通幻寂霊禅師の最初は明峰禅師の弟子でありました。つまり、峨山禅師の弟子と言いながらも、実際はその人格形成、或いは修行の過程において明峰禅師の影響が非常に大きかったということが言えます。そういう意味では単に峨山禅師の弟子だけでなく、明峰禅師の弟子であったことが、峨山禅師の弟子二十五哲となつてからも影響が大きかったということを忘れてはなりません。

二点目ですが、今、松田先生もおっしゃいました「八十有九」の所でこの『山雲海月』云々という所がございますけれども、実は峨山禅師、九十一まで生きてくれますけれども、その多くが七十代、八十代の時のお弟子さ

んばかりであります。これは現代で考えても、我々坊さんは五十、六十歳なったら弟子はもう作らないぐらいの風潮がありますけども、峨山禪師は本当に亡くなる直前迄、そして、その時その時に応じて、来た人に一人ひとりゆつくりと指導しました。それがさつき言いました「官には針をも容れず、私には馬車をも通ず」と本当に気持ちがあるのなら自分の所に来なさいと親切心があります。

如実な例が私のお寺の御開山の通幻さまは非常に口臭が強く、とても悩んでおりました。ある時、峨山禪師に相談した所、「毎朝梅干を一個ずつ食しなさい」と、親切な指導をいただき、それを食したところ口臭が消えたということです。そのことが今、總持寺や永平寺でも御上壇で梅干をあげていることの一つの先駆けになっているかと思えます。そういう風に峨山禪師が一人ひとりに合わせて丁寧に指導していたということも良く分かります。ファーストフードじゃなくてスローフードの教えだった。しかも、七十代、八十代、九十代に至るまで、晩年に至るまで積極的に教化活動、弟子の育成というものにあたったということは、私たちが皆さん自身も色いろな教えとか流れとかその地で学ばなければならないことがあるのではないかと、いう点があるのではないかと思えます。

宮地

道元禪師関連書籍は、例えば書店に行くと必ず書棚にずらっと並んでいるのですが、瑩山禪師あるいは峨山禪師関連書籍は書店に行ってもなかなか手に取る機会がありません。皆さんも同じ思いではないでしょうか。今日の私の発表、そして他の先生方の発表にもありましたように、瑩山禪師も峨山禪師も、今のこの世の中にも通じる教えを非常に多く残されていらっしやいます。できれば、やはり宗門内でもっと今日のようなシンポジウムを開催して、宗門内にもっと教えを広めていけるようになれば良いのではないかと、それらのシンポジウムによって、宗門の未来と私どもの日々の生活もより潤っていくのではないかと思っています。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは、会場の皆様からのご質問ですが、まず「峨山禅師の著書『山雲海月』の一番大切な内容を一言で表現して頂きたい」という大変難しい禅問答のようなご質問があります。どうでしょうか。どなたか答えて頂けますでしょうか。

松田

難しい質問ですけれども、峨山禅師が、『山雲海月』で言いたいことを一言でというのはなかなか難しく、特に先ほど言いました様に、公案禅の展開のなかでも用いられている経緯がありますので、非常に難解な内容を多く含んでいるのがこの『山雲海月』であります。そのため、一言でまとめるというのはなかなか難しいのですが、この『山雲海月』というのは、非常に説法の対象を限定しています。「三五人」という非常に限られた、嗣法相続を承けたお弟子の中でも、おそらく太原宗真禅師や通幻寂霊禅師等の極めて親密なる弟子たちに対して、峨山禅師が最晩年言い残しておく様に説法をこの行っているものをまとめているものが『山雲海月』ということになります。

一言でというのはちよつと難しいのですけれども、嗣法した弟子たちは、今度は峨山禅師の教えを自らの教えとし弟子たちに説いていくわけですし、実際に多くの弟子たちが大変多くの門人達を育成するわけになったわけです。この経緯からも、そして『山雲海月』の内容からしても、峨山禅師という人がこの嗣法した弟子たちに求めたことは、やはりこの自分の教えを断絶させない様に相続をしていきなさいということが、一番強い主張だったのではないかと思えます。ただし、この相続ということが、『山雲海月』という文献をありがたく頂いたり、和尚さんの教えをただ聞いて分かったというだけで済ませてはいけなないのだな、という様な、自分がこの日々の修行とか、生活の中にこの確認していくとか、証明していくこともって相続をしていくのだという様なことを、恐らく峨山禅師という人は嗣法の門人に対して最後に託しているの

であろうと思います。

具体的にこういう教えというよりは、むしろ自らの主体的な参学によって伝えあrawしいく姿勢というものが『山雲海月』に貫かれている、最も大事な内容ということになるのではないかと、私なりに思っております。

司会

松田先生には難しいご質問にお答え頂き、ありがとうございます。この会場には、仏教文化研究所の特別顧問であり、鶴見大学前学長であり、東大名誉教授であります木村清孝先生がいらつしやつております。突然で恐縮ですが、何かご質問があればお願い申し上げます。

木村

本日は、先生方、本当に中身のある講演及びご発表を頂きました。そして又、今それぞれの先生から補足的にお話頂いたことで、実は質問したいなと思っていたことの幾つかは消えました。ありがとうございます。まずそのことをご報告申し上げます。

せっかくご指名頂きましたし、このような機会はなかなかありませんので、最初に松田先生にお伺いします。私も『山雲海月』には大変関心を持っており、何度か目を通したことがございます。しかし、峨山禅師ご自身のお考えがどれだけきちんと反映されているのか、なかなか読み取るのが難しいなど感じます。ただ、先ほどの松田先生のお話で少し安心したのですが、上巻は、ある程度、信頼性が高い様な気はしております。

ともあれ、やはり延宝本の出現そのものが、思想的には重要な意味があるのではないか。というのは、中世の宗門には公案を重視して進めてきた傾向がありますね。あえて言えば、それに対する一種のチャレンジ。そういう意味合いもあるのかなと思つたのですが、その辺りのことを先生はどのようにお考えになるかとい

うことをお聞きしたいと思いました。

それからもう一つは、宮地先生のお話で、先生は峨山禪師の「和合」「一味同心」を聖徳太子以来の伝統として強調されていました。確かに日本思想史の面からは、そういう押さえ方も大事なのかとは思いますが、けれども、他方、仏教では、もともと仏法僧の僧、僧伽の理想、あるいは基本として「和」が置かれています。ご承知の通り、「和合衆」という表現もございますね。

高祖さまのお言葉にある「僧は勝友なるが故に帰依す」の中の勝友も、和合して修行に励む、それゆえに勝れた友、仲間たちと考えてよいかと思えます。また、仏教の一つの重要な教義として、「六和敬」もあります。宮地先生は、これらの思想との関わりについて、もしもご見解があればお聞きしたいです。

以上です。お二人の先生方、よろしくお願ひします。

松田

ご質問頂きましてありがとうございます。延宝本の成立につきまして先生のご意見をお伺いいたしましたので、私の考えておりましたことを少し補って頂いたのではないかと思います。非常にちよつと気を強くしたところでございます。確かにこの延宝本が刊行されるということは、一つの大きな出来事として捉えることが出来るだろうと思えます。これまでこの嗣法門人の間だけで、ごく限られた人の間だけで伝授されてきたものが、光を当てられて、刊行されるということは、別の意義を持って、取り扱われることになったということを示しているだろうと思えます。

この延宝年間という年ですが、この年代は非常に曹洞宗という教団にとりましては色いろな出来事がこれから湧きあがってくる、丁度最初の時期という様な感覚を持っておりまして、江戸時代とそれ以前のこの中世の曹洞宗というのは、そういう意味ではガラッと傾向が変わっていくのだと思うのです。この一つには江戸

時代になり、圭室先生のお話にあったように、江戸幕府によってこの曹洞宗が全国規模の教団として認知されて統制の対象になつてゐる。これまで地方ごとにグループ単位でまとまつていったものが、全国規模の教団として認識されるようになった。もしくは、中国の明から黄檗宗という新たな禅宗の一派が入つてくる。そういう頃の時期はこの延宝年間の少し前くらいになります。延宝五年にその『山雲海月』が刊行されていますけれども、その意味で曹洞宗の人たちの中で自分たちの宗旨、宗旨や教団というものの独自性というのはどこにあるのかとか、もしくは、この教団の一体性というのはどういう形でこの確認していけば良いのかということが江戸時代の初期に、改めて問題意識化されていく。その中で、こういう中世まで伝えられてきた著作が、改めて別な意義をもつて打ち出されていく、刊行されていくという様なことが起きていくのではないかと思うわけです。そして、例えば曹洞宗にとっては現在、宗旨の根幹は道元禅師だという様に良く言われるのですが、道元禅師という人に光を当てられるのも、実はこの後というような状況におそらくなつていくのだらうと思ひますので、そういう意味ではこの時代だからこそ出たものという風に、刊行されたものという風に位置付けても良いのではないのかなと、私は思つております。

宮地

木村先生がおつしやつたように、メンタル面あるいは信仰心の部分において、必ず「サンガの伝統としての和」「六和行」がベースにあつたでしょうし、それを無視して宗教者として活動するとは思えません。僧堂生活は当然それらに基づいて行われていたと思ひます。ただ瑩山禅師そして峨山禅師が活躍の時代になりますと、やはり教団を運営していくこと、平たく言えば大きくしていくこと、それから他宗派との兼ね合い・関係もあつたはずで、曹洞宗として他宗派との大がかりな直接交渉は無かつたでしょうし、深く内部事情を知つていたとは考えられませんが、「あそここの宗派はこういう風にしていた」とか「こういう風に活動しているな」く

らしいのレベルの情報は入って来ていたと思います。今回私のレジユメの中にも他宗派の動向をいくつか挿ませて頂いたのも、そのためです。それらの情報を加味しつつ、では曹洞宗として独自性をどこに持って行って、それをどうやって具体的な形にして打ち出せば、より修行僧や檀信徒が増えていくのか、あるいは教団が大きくなっていくのかを考えたと推測できます。若干宗教者としてどうかという切り口になるかもしれませんが、道元禅師の意をくんで教団を大きくしていくかんとする中で、様々な要素に目配りをしなくてはいけないと、おそらく瑩山禅師も峨山禅師もお考えになったと思います。その中で、太子信仰は日本に古来ある信仰ですから、これを採り入れることによって、より民衆に訴えていく、少し言い方が過ぎるかもしれませんが、それをベースにしてより教団を大きくしていくことをおそらく運営面で計算していたのではないかと。要するに、当時の宗教者は教理教学面と実際の教団運営面の両方を柱として持っていて、そのうちの片方、教団運営面において、太子信仰、あるいは冒頭に申しましたような地藏信仰などを採り入れることにより、修行僧や檀信徒の精神面に近づき、さらに教団を大きくしていったのではないかと考えています。今回の私の発表は、二つの柱を持っていたうちの一つを強調したとご理解ください。

司会

松田先生、宮地先生、お答え頂き、ありがとうございます。お時間だいぶ迫ってまいりました。それでは、閉会の辞を大本山總持寺副監院石田征史老師にお願い致します。

石田征史老師 ご紹介頂きました石田でございます。本日は大本山總持寺の共催という立場で、閉会の言葉を一言述べたいと思います。各先生方におかれましては、このシンポジウムにおきまして、本当に貴重な研究成果を丁寧な形で発表して頂きまして、誠にありがとうございます。更にディスカッションの中でまたご補足・

ご教示頂きました。本当に峨山禅師をめぐってこれだけの成果が出来ることはなかなか貴重な機会だと思っております。今後もこの研究を更に深めていって頂ければと思う訳でございます。

本年は、峨山禅師様の六五〇回大遠忌という年でございます。この迫ってくる十月御本法要に向けてこういった企画が非常に有益な一助となることと思っております。この大遠忌が無事円成に向けて、更なる皆様方のご協力・ご一助を賜りたいと願いしながら、閉会の言葉とさせて頂きたいと思えます。本日は誠にありがとうございました。